

閑話休題4

しづかりいふ。

明時代に造られた西欧の渾天儀のレプリカ（いくつものリングを組み合わせた天球儀を模したものを4匹の龍が支えている像）の縮小レプリカを眺めながら、天眞^{あまざき}々^{まこと}は長髯を撫で、キラバッシュ・パイプを燻らし、例によって例の如く言うに言った。

「小生らは閉じられた球体の中にいる。あたかも車輪の遊覧の中を飽きもせず駈ける鼠のように。同義反復を繰り返すばかりで、実質的には何も知らず、理解していない。そしてかような判断自体もまたこの空転の中での出来事に過ぎない、という判断も。」

どこにも突破口はない。堂々巡りだ。進展はない。外から眺められないからこれら判断も比喩でしかない。この中に於いてしか成立しない了解があるだけだ。しかもすべてが既に出来上がっていて、行先は決定済みだ。そうではないか。思考はもうかたがけが決まっている。観ぜよ、ほら、実地に即して鑑みたまえよ。原的な直観に於いてはさように映じている。唐突に。そうではないか。意識を立ち上げるときには、既に意識の中にいて、そのフォルムはもう決定事項としてかたがけがあり、気が附けば既にその中に投げ込まれているではないか。少なくともそう観ぜられないか、原的に。出発するときには、もう出発点及び周囲環境がかたちを成してはいないか。

逆にそうでなければ何もできないし。小生らは無規定に自由にはなれない。造られた感性によってそう観ぜられる。小生らは出来上がった中をぐるぐる回っているだけだ、と既に映じている。そして心には自動的にかように浮ぶ『何をどう説明しようが同義反復だ。何の理解にも達しない。規定された軌道の上を走るだけだ。しかも軌道はどこにも着かない。無限田環のようなものだ。何をどう考えようとも、予定まった材料がなく、思考のかたちや進行の形式はもう決められていて、その閉じた球体からは抜け出るやり方がそもそもない』と。

原的直観に於いてはそうとしか見えないが、原的に直観されるだけで根拠はない。しかしもし正しかったとしても、それはそれで空疎^{くす}ということに、一応なる……んだろっな」

キユーバの葉巻を本箱から出して炎に炙りながらウォーム・アップしていた天平普齋が、

「何だよ、最後にトーン・ダウンしたね」

髯を撫でる手を止め、にんまり微笑む。

「そりやねえ。そうせざるを得ないじゃないか。」

どうせ、何言っても同じ。いや、同じも違っても脳神経細胞の内のイオンの流入による正負電荷の逆転に過ぎないからね。何なんだろうね。何て言ってもいいのかわからない、わかりようもないよね。とてもかくても候、だね」

「ふむ。球体の突破口は本当にないのかな」

「そんなことはない。未来は常に可能性だ。生は未来を向くことだ。生きているということが既に未来だ。そもそも球体に

封ぜられているという捉えが既に球体内の出来事なので、むろんこの考えもそうだが、そうであってはいけないという判断も同じだから、所詮、或る意味、これは気にしなくともよいのかもしれない。真実だの妥当だの、そういうフォルム、輪郭やカテゴリーや枠（座）や位置や、根源的な在り方・捉え方、これらの初歩の時点で既に思考は及ばないが、それを及ばないと禁忌し規制するのは論理の規程が規定するところに過ぎない、という批判も含めて論理の規程が規定するところ（どこ）までも論理の規程が規定するところ。玉葱の皮剥き状態。いったい、論理は何様なのか？

小生らは人知を凌駕して龍の如き認識に立たなければ何も為せない。

いずれにせよ、かような問いの門の前に立つものは、ヘーゲルやフッサールのような大きな転換の起点に立っているとも

言える」

「それ以上かもね」

「可能性はある」

「龍のようにね……。当座はどうすればよいだろうか」

「感情も含めて、価値観から動機へと導くこの心的現象、思考と呼ばれるもの」の多くは擦り込みから成立していると思われる。行為による習慣によつて醸成される感覚的な馴染み、インパルスの新ルート、慣れた。やはりフィジカルな面から逝くのが妥当だろうね。

ちなみにニューロンは心臓にもあるぞうだ」

「聞いたことがある。」

それはそれとして、つまりは修行か」

「そうだね。近いものがある」

「そんなに新しい道かな。もつそこは仏陀などが通つた道じゃないのかな」

「そつとも言える。脱西洋、東洋への回帰……」

「籠もりでもするか？」

「タバコ吸いながらか？」

「瀧行は無理だな」

「するときに吸わなけりやいい。」

白隠は言つた。静中の禅よりも動中の禅が難しい、と」

「聞いたことない。どつという意味だ」

「記憶違いかもしれない。ともかくも言いたいことは、世間の騒音（欲望まみれの狂騒）から離れた静かな山中での禅は容易いが、市井の営みに囚われ、ざわめきの中で様々な気遣いやしがらみや枠に煩わされ、欲望を刺激されての禅は為し難い、と……」だ。

山中もよいが、最後は山を下りるべきだろうな。揺るぎない完成のために」

「そっかな。仏陀は厭離を説き続けた。近附けば必ずや負ける人間の性を知り抜いて、近附かないことが唯一の道だと説いていたように僕には思える」

「彼は対機説法を得意とした。人に応じて内容を考慮している。大概の人間に価値観の舎棄は完成できないから、そう説いたのだ。サンカラン※(僧伽藍) ような人物じゃないとね。 ※伝弟子 参照: <http://book.geocities.jp/siveyrah/003.pdf> 恐らく多くの人は彼の行為に大いなる疑念を持つだろう。それほど小生ら人間には度し難いことなのだ」

「なるほど。」

或る意味、超人への道だな」

「新たな次元、新たなステージへ逝くことから、そういうことになって当然だろう」

「彼の行為は二面的には種の存続という宇宙が与えたテーマに異逆するものだ。その凄絶さは非情とか、非人間的などというレベルで簡単に考えられるものではない」

「二面的に?」

「そっだ。」

総的に観れば、これも宇宙の原理の一つだ。なぜなら宇宙の素粒子によって宇宙の化学的・物理的法則の下に宇宙で起こっているのだから」

「それはそれで閉じた球体だな。結局何が起ったとしてもその範疇か」

「別に悪いことじゃない。さつきも言ったとおりその捉えは今の認識だ」

「そっか。ステージが変わるんだものな。」

未来が楽しみな気がしてきた」

「小生が常々百万年生きたいというのも道理であらうぞ」

「そりゃね」

「もしかしたら認識の地平が変わることがそれを実現しない、とは言い切れない。それほどのことなのだ。逆に言えば、認識が小生らの考えているような認識ではない可能性がまったくないわけではないと言っていることだ。小生らは閉じ込められているので、まったくそれに気が附く機会が与えられていない、のかもしれないのだから」